



# 瓦鍾馗と像形瓦展

平成 22 年 1 月  
加西市教育委員会  
市史・文化財室

# 『加西市史』 史料展示

## 瓦鍾馗と像形瓦展

**展示名** 「瓦鍾馗と像形瓦展」  
**展示期間** 平成 22 年 1 月 6 日～ 29 日  
**展示場所** 加西市立図書館 オープンミュージアム  
**展示主体** 加西市教育委員会 市史・文化財室

### 1. 鍾馗とは

主に中国や日本の民間伝承に伝わる系の神様です。日本では、除けや学業成就に効があるとされ、端午の節句に絵や人形を奉納したりします。

また、鍾馗の図像は魔よけの効験があるとされ、旗、掛け軸として飾ったり、屋根の上に鍾馗の像を載せたりします。

鍾馗の図像は必ず長い髭を蓄え、中国の官人の衣装を着て剣を持ち、大きな眼で何かを睨みつけている姿が多くみられます。



鍾馗札

(新潟県東蒲原郡阿賀町)



鍾馗 (河鍋暁斎画)

## 2. 鍾馗の誕生

あるとき、中国の唐の皇帝玄宗（唐の第六代皇帝、在位712～756）が熱病でうなされていきました。彼の夢の中で、枕もとに「虚」「耗」という小鬼が現れ、いたずらを始めます。

皇帝が誰かいないのか！と大声で叫ぶと、どこからともなく破帽子をかぶり、角帯をつけ、革靴を履いた、ひげ面の大男が現れ、あっという間に皇帝を悩ませていた鬼を食べてしまいます。

小鬼より怖い形相で立つその者の正体を問うと、終南山の鍾馗と名乗ります。彼は科挙（唐の文官になるための国家試験。唐の都長安で行われる）に失敗し、国に帰るのを恥じて宮中で自らの命を絶ったが、高祖帝（唐の初代皇帝、在位618～626）が不憫に思い手厚く葬っていただいたので、恩を返すために参ったと言います。

夢から覚めると、玄宗の病は不思議にもすっかり治っていました。そこで、絵師に命じて夢でみたままの鍾馗の姿を描かせ、災厄を祓う守り神としました。

鍾馗は、こうした伝承から人々の間で、邪悪なものや疫病から家を守る魔除けの神として信じられるようになります。



**現存する国内最古の鍾馗の絵**

平安時代末『益田家本地獄草子』「辟邪絵巻」  
(国宝：奈良国立博物館所蔵)

### 3. 瓦鍾馗の導入伝承

江戸時代、京都の、ある家の奥方が原因不明の病で伏していた。手を尽くしても回復しないのに困り果てた医者は、ある日隣の屋根に鬼瓦が載っているのに気付く。

もしかしたらこの病は鬼瓦で除けられた災いがこちらに降りかかっているためかもしれない。でもお向かいの鬼瓦を降ろしてくれとは言えない。あれこれ考えた末、深草の瓦職人に鍾馗像を作ってもらい鬼瓦と睨みあう位置に据えたところ、たちまち病は全快したという。

この伝承をもとに、江戸時代末期に京や都市部で、鬼瓦を上回る邪鬼払いの守神や霊力障壁として流行すします。瓦鍾馗の設置については、大きく分けて下表示した5パターンに分類することができそうです。

森田家の場合は、かつての町並みや聞き取りから「パターンB」の可能性が高いとみています。現在は十字路になっていますが、かつては御旅通で止まっていた本町通と御旅通によってできたT字路正面に建っていた建物の上にあったのではないかと考えています。

また、井之上家の場合は、大年神社東にあった建物の移築したと聞いているので「パターンC」に該当するとみています、大年神社の霊力を緩和する目的だったと考えられます。

<b>A</b>	向かいの建物に大きな鬼瓦が上っている建物	向かいの鬼瓦によって弾かれた邪気や悪霊が、こちらに入ってこないように、鬼（鬼瓦）より強いとされる鍾馗を上げることによって、鬼瓦が邪気を弾く力を上まわることができる。
<b>B</b>	T字やL字路など路地の突き当たりある建物	道教では魔物は直進しかできないとされているため、魔物が道を曲がらず自分の家へ飛び込んでこないように。
<b>C</b>	神社の正面や寺院の横斜めの建物	あまりに家の立地が良すぎ（ありがたすぎ）で、かえって良くない。
<b>D</b>	墓地や霊地の隣にある建物	鬼瓦と同様に死霊や悪霊を防いだり、強すぎる霊力を持った場所からの影響を軽減する。
<b>E</b>	その他	鬼瓦の向き以外の方向から邪気などの侵入が考えられる場合。 家主の好みにより任意の場所に設置。

## 4. 市内の瓦鍾馗と像形瓦

### 鬼瓦型瓦鍾馗

森田家所蔵（北条町御旅町）

制作年代 万延元年（1860）江戸時代末期（14代徳川家茂の時代）

製作者 巴門？

#### お向かいさんへの気遣い

体は正面を向かず右手方向を睨んでいる。右手の剣は下方へ向けられ、左手で右袖をたくし上げている。

瓦鍾馗は、鬼瓦が弾いた邪気・悪霊が家へ侵入するのを防ぐのが役目ですが、邪鬼を食らったという鍾馗伝承から、鬼より力が強い存在とみなされているので、正面を向いていると対面の鬼瓦の力まで弱めてしまうと考えられたようです。

そのため、この鍾馗のように横を向き鬼瓦の目線を外したり、笑い顔など、向かいの鬼瓦の力を殺してしまわないような手法がとられています。自家の繁栄だけでなく、カドを立てないで町屋の共存共栄を図ろうとする思いがうかがえます。



# 鬼瓦型瓦鍾馗

## 井之上家（北条町栗田）

詳細 屋根上のため詳細は不明

### まだまだ現役です

現在も井之上家の屋根の上に上がっている現役の鍾馗様です。

鰐広の帽子を被り、左手は破損していますが邪鬼（胴体部のみ残存）を捕まえていたようです。右手には剣を持っていたのでしょうか。

多彩なバリエーションをみせる鍾馗像の中で、現存する国内最古の鍾馗の画像の「辟邪絵巻」にある鍾馗の要素（鰐広帽・邪鬼・剣）を色濃く再現しています。

元は南町大年神社の東隣の建物に上っていましたが、建物の移築とともに一緒に移ってきたといわれています。元の場所が神社本殿に正対する位置にあったので、強すぎる神社の力の軽減と、神社に弾かれた邪気・悪霊が家に侵入するのを防ぐために上げられたのでしょうか。

邪鬼を捕まえて見せているのは、正面の大年神に対し「あなたに対抗しているのではなく、私の相手は邪鬼です」と伝えているのでしょうか。



# 鬼瓦型瓦恵比須・瓦大黒

## 宮崎家《京屋》所蔵（北条町栗田）

詳細 不明

### こちらは招き入れ

邪気や悪霊の家への侵入を守る鍾馗とは逆に、福を招きよせるために上げられた恵比寿さんと大黒さん。

かつては米蔵だった土蔵に上がっています。

（左：恵比須天・右：大黒天）



## 5. 市外から持ち込まれた瓦鍾馗

### 棟瓦型瓦鍾馗

喜谷氏所蔵（北条町栗田）

#### 海辺の鍾馗

詳細 不明

喜谷氏が姫路市の浜手の町にあったものを、知人から譲り受けたといえます。棟瓦の向きに対して直角に設置されています。

右手に剣を持ち、左手は帯紐を握っています。肩を怒らし袖は風を含んだように大きく膨らんでいます。腰をやや屈曲し胸を張るなど、風に逆らいながら直立しているようにみえます。海風に乗ってやってくる災厄を睨んでいるのでしょうか。





# 独立型瓦鍾馗

## 設置場所を選ばないタイプの瓦鍾馗 喜谷氏所蔵（北条町栗田）

こちらの3体も喜谷氏の所蔵ですが、京都市内で収集したもので、かつては京の町屋の屋根に上がっていたと思われます。

鬼瓦の代わりに上げられた加西市産の2体と異なり、独立した形状のなので屋根の上ならどこにでも設置できようになっています。

壁面に沿って置いてみたり、商家の間口（入り口）上に置くなど、鬼瓦の睨みが届かない角度から侵入を試みる邪気を祓ったのではないのでしょうか。

### うかつに近づけば・・・

右手方向へ体を向け、顔は右手上方を睨んでいます。向かい合いにならないように気遣いを見せていますが、左手で帯を絞り衣の裾と袴を押さえ、左足を前方へ向けるなど、いつでも右足を踏み込んで斬り付ける用意があるようにも見えます。



## やる時はやります

正面を向き体の後ろに右手の剣を隠している。

剣を隠しているのは正面に対し敵意が無いことを示しているようにみえます。

わずかに剣先を覗かせているのは、好戦的でないものの侵入者（邪気）への攻撃性を失っていないことを現しているのでしょうか？



## こちらはいっさい妥協なし

正面を向き、右手で剣を水平に構え、左手は帯と裾を押さえています。

正面に対する気遣いが全く見られないので、T字路の突き当りの家や、悪霊が集る墓地に向かってなど、直接的に邪気への対抗策として上げられたのではないのでしょうか。



